

じんけんさくぶんにゆうせんさくひん  
**人権作文入選作品**  
しょうがくせい  
**(小学生の部)**

ぼくのおじいちゃん

太宰府南小学校1年 岡 大輝

ぼくは、おじいちゃんがだいすきです。いつも、あそんでくれます。

でも、さいきん、おじいちゃんは、よばよばです。めとみみがわるくなりました。だから、ぼくは、おこづかいで、ほちょうきをかって、プレゼントしました。おじいちゃんは、とてもよろこんでくれました。

めは、すこしずつ、しぜんになおってきているのでうれしいです。

これからも、おじいちゃんをたいせつにしたいです。ずっとずっと、ながいきをしてほしいです。

だって、ともだちでしょ

太宰府南小学校1年 古寺 桜子

わたしがすいとうをおとしてしまったとき、ちかくにいたともだちがすいとうをひろってくれました。わたしが、

「ありがとう。」

といったら、

「だいじょうぶ。だって、ともだちでしょ。」

とってくれました。とてもうれしかったです。

おにいちゃんとけんかして、なっていたときも、

「だいじょうぶ。」

ときいてくれました。わたしのことをしんぱいしてくれているんだなとおもいました。

どっじぼうるでまけて、くやしがつていたら、

「げんきだして。」

といつてくれました。そうしたら、ほんとうにげんきがで  
てきました。

ともだちがいるっていいなとおもいました。わたしも、  
ともだちのことをしんぱいしたり、げんきづけたりしてい  
きたいです。



「だいじょうぶ。」

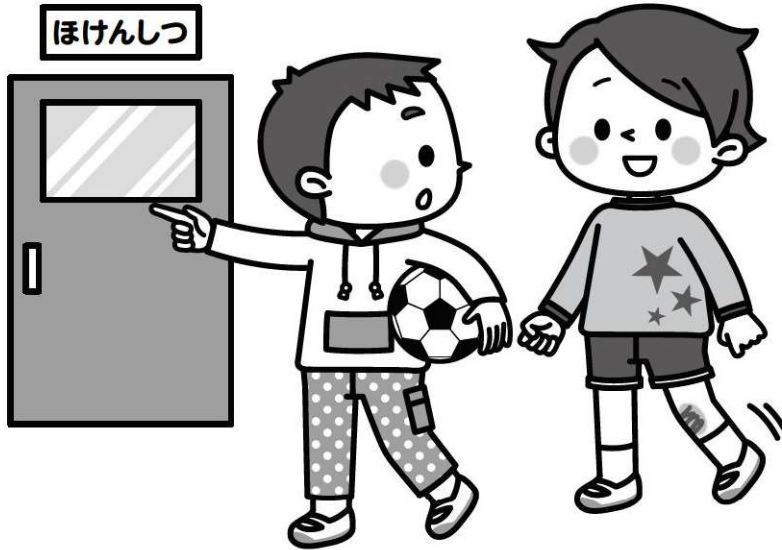
水城小学校3年 池田 日向

ぼくは、友だちの言葉でうれしかったことがあります。

それは、二年生のときです。ぼくたちは、クラスで氷お  
にごっこをしていました。ぼくは、にげるときにころびま  
した。一人で立ち上がろうとすると友だちが来ました。

すると友だちが、「だいじょうぶ。」と言ってくれまし  
た。ぼくは、「ちよつとけがしたくらい。」と言いました。す  
ると友だちが、「ほけん室に行こう。」と、言ってくれまし  
た。ぼくは心がうれしくなり、「ありがとう。」と思いまし  
た。ほけん室に一しょに行きました。帰って来たらクラス  
の遊びの時間はもう終わっていました。友だちに悪かった  
など思ったので、教室にもどった時、友だちに、「ありがと  
う。」と言いました。友だちは「これくらいできるよ。」と  
てれていました。

このことから「だいじょうぶ。」という言葉は安心することば言葉だと思いましたが、これからは、ぼくもいろいろな人に「だいじょうぶ。」という言葉が使えるようになります。



## お父さんの仕事

水城西小学校4年 阿南 栞里

私のお父さんは、主にシロアリのくじや、ちきゅうかんきようを守る会社ではたらいしています。その中でも私のお父さんは、人事部の「さいようか」という所ではたらいしています。人事部というのは、会社ではたらいしている人にまつわる仕事をする所です。例えば、お給料の計算をしたり、じこがないように安全にはたらけるかんきようを作ったり、会社に新しく入ったりやめたりするときに必要なしよるいを集めたりします。お父さんは、たまに代表で会社のことを伝えるための動画をとって配信しています。そうすることで、会社のことを広めているそうです。

そんな「さいようか」は、会社ではたらきたいと思う人に会社のことを説明したり、めんせつをしたりしています。そのときに大切にしていることがあると、お父さんが



教えてくれました。それは、生まれた場所や、家族の仕事  
を聞いて、ふさいようにしたりしないということです。つ  
まり、全ての人の人けんを大切にしているということだ  
す。それを聞いて私は、お父さんの仕事はりっぱだな、かっ  
こいいな、と思いました。

そこで、私は、自分もみんなを幸せにするために、なに  
かできないかと考えてみました。まずは、人の考えている  
ことをかつてに決めつけないようにしたり、仲間外れにし  
たりしないようにすると思いました。他にも、ふわ  
ふわ言葉、ふわふわ行動を心がけたら、きちんと人けんを  
守ればみんな幸せになって世界中がハッピーでえがおがあ  
ふれるといいな、と思いました。

お父さんの会社で大切にしていることを知って、自分  
にできることを考えてみて、一人一人が好きなことを選  
べたり、したいことができたりすることは、当たり前前に保  
しょうされなければならぬと思いました。私は、このよ

うなことを大切に生きているお父さんをそんなけいしてい  
るし、この会社はこのようなルールをつくった人もすごい  
な、と思いました。

これから、私は多くの人に出会っていきます。その人の  
よさや考えをみとめ、おたがいが幸せな気持ちですごし  
ていけるよう、相手の立場や考えをそんなちようしていきた  
いです。



# 「泣いたり、笑ったりのパラリンピック」

太宰府西小学校5年 来見田 優菜

わたしは、総合学習を通してパラリンピックについて学習しました。学習して思ったことは、パラリンピックのぶ台は、障がいがある・なしにかかわらず、自分の存在を証明するところなんだということです。

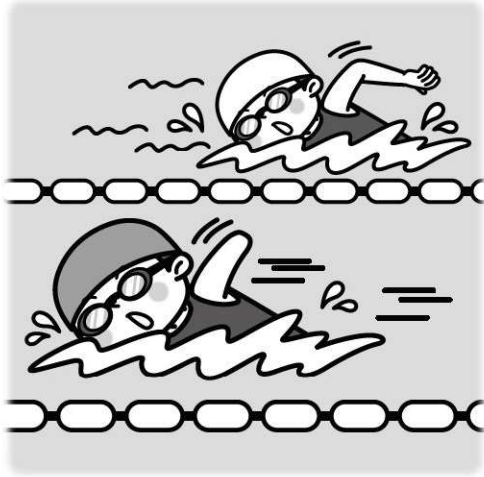
その理由は二つあります。一つめは、パラリンピアンのだ下選手や木村選手の活やくを見たからです。だ下選手は、わたしと同じで太宰府市に住んでいます。同じ地域に住んでいる方が金メダリストになるなんておどろきと同時にほころしく思えました。木村選手は競泳の選手です。わたしも水泳を今もして同じ競技をしているので注目していた選手の一人でした。木村選手は見事に金と銀のメダルをかくとくしました。わたしが特に注目した選手は、同じ地域に住んでいて同じ競技をしていてとて

も身近な存在に感じます。そんな二人の方をととも尊敬しますし、今回の活やくによって日本だけでなく、全世界に自分の存在を証明できたと思うからです。二つめは、障がいをもった方との出会いです。それは、ある水泳の大会でのことでした。わたしのとなりのコースの女の子をレース前に見ると、その子は片うでがひじの所までしかありませんでした。一しゅんわたしは、おどろきました。「なぜ、片うでしかないんだろう」と心の中で思いました。一人でキャップやゴーグルをつけている姿にも目をうばわれてしまいました。いつの間にかその女の子を意識している自分がいました。レースが始まりました。わたしは、いつものように泳ぎに集中してレースにのぞみました。結果、その片うでの女の子に負けていました。レース結果にわたしはおどろき、くやしかったです。その女の子のことを尊敬している自分もいました。片うででも同じ競技をしている仲間としてその女の子を応援していきたいし、次は負



けないようにこれからも練習をがんばっていききたいです。

今回の学習で、パラリンピックに興味のなかったわたしが、東京パラリンピックをテレビで夢中になって見ていました。オリンピックとパラリンピックには違いはなく、目標をもつて一生懸命取り組むアスリートなんだと思います。水泳をしているわたしですが、この学習を通して学んだことをこれからの競技に取り組む姿勢に生かしていきたいです。また、これからの未来が障がいのある方にとって明るい未来になるように考えていききたいと思います。



## 「体が不自由だろうと変わらない」

太宰府西小学校5年 久間 稜太

ぼくは、パラリンピックを見たり、総合の学習をするまでは、しょうがいのある方にはとく別あつかいをした方がいいと思っていました。しかし、これまでの総合の学習のなかでしょうがいのある方の話を聞いていくうちに、それはちがうということを知りました。

ぼくは、テレビのニュースで、しょうがい者差別や人種差別などが起こっているのを見ました。でも、総合の学習で体の一部が不自由なだけであって、何もぼく達と生活の仕方などは変わらないということを知り、おかしいなと思いました。

ぼくは、パラリンピックの競技などを実際に経験してみました。シッティングバレーボールを行いました。すわって行う競技なのでとっても移動がむずかしかったです。

しかし、パスするときのボールの高さを工夫することで味方にもつなぐことができたので楽しさも味わうことができました。また、パラリンピックが実際に始まって見えました。そこにはオリンピックにないような機械や種目がありました。ここに出場するまでにはたくさんの方の努力と工夫があるんだろうなと思いました。なにかできないことや、苦手なことがあるうえでパラリンピックというだけどもたてる場所ではないぶたいに立つことはかんたんなことじゃないだろうなと思いました。

パラリンピックを見てしょうがいがある方たちにとって、今の社会は過ごしやすいのかを考えてみました。そこで、いままでの生活を思い返すと点字ブロックの上で自転車がおいであつたりごみがすてあつたりと、これはしょうがいがある方からしたらとっても生活しづらいし、ぼく達自身も生活しづらいのではないかと思いました。

ぼくは、パラリンピックや総合の学習で、特別あつかい

をすることが親切と思うのはちがうということを知りました。だから特別あつかいではなく、その人にあつたサポートや環境を整えることでだれもが過ごしやすい社会にしたいと思いました。そのために、点字ブロックの上で自転車があつたり、ゴミがたくさん落ちていて、歩きにくい場所をつくつたりしないようにしようと思いました。

総合で学んだことやパラリンピックで見たことを生かして、だれもが生き生きと過ごせるようにぼくもさらに学び、考えていきたいです。





## パラリンピックが気付かせてくれたこと

太宰府西小学校5年 尾崎 由梨

私は、総合学習の時間に「パラリンピック」について学習しました。この学習をするまでは、私はパラリンピックについてあまり知らなかったし、興味もありませんでした。しかし、総合学習でリオパラリンピックのダイジェストビデオを見た時、私はとても感動しました。それまでの私は、しょうがいのある方を「かわいそうだ」と思っていました。しかしビデオに映っていた方たちは、生き生きとしていて、競技に夢中になってがんばっていてとても楽しそうでした。この映像を見た時、私は自分の考えていたことがまちがいで、思い込みだったことに気が付きました。しょうがいがあっても決して「かわいそう」なのではなく、少しの工夫や手助けで、誰もが同じように楽しんだり、生き生きと夢中になることがあったりするのだと分

かりました。

パラリンピックに出ている選手の中でも、私がすごいと思った方がいます。それは、車いすバスケットボールの香西選手です。香西選手は高校を卒業した後、アメリカへ留学しました。これを知った時、私はとてもおどろきました。香西選手は足が不自由で、車いすに乗って生活しています。それなのに、言葉が通じないアメリカに、一人で行ったのです。きっと家族にも会えなくて不安でさみしかったと思います。私だったら出来そうもないと思いました。それでも香西選手はあきらめずいっしょうけんめい練習して、東京パラリンピックでは銀メダルをとりました。東京パラリンピックを見てみると、パラリンピックの選手は、しょうがいがあることで大変なこともあるかもしれないけど、夢に向かっていっしょうけんめいなところは、とてもかがやいて見えました。私は、興味がなかったパラリンピックを、もっと見たいと思うようになりました。そ



これは、選手のかげやきや一生懸命さに感動し、かつこい  
と思つたからです。

私は、この学習を通してパラリンピックへの考えが変わ  
りました。以前は、パラリンピックはしょうがいのある方  
がするスポーツで、しょうがいのある方は、かわいそうだ  
という考えでした。しかし、自分に合った道具や工夫を  
することで、しょうがいのあるなしに関わらず、誰もがス  
ポーツを楽しむことができるのだと考えるようになりま  
した。よく知らないことを、勝手に思い込むことはまち  
がいだとも気が付きました。これからは、いろいろなこと  
に対して、決めつけた考えをもつのはやめようと思いま  
した。

パラリンピックについての学習で、私はしょうがいのあ  
る方々へのまぢがった思い込みに気付くことができました  
た。また、夢に向かつていっしょうけんめいに努力するこ  
との素晴らしさを感じることができました。これからも、

いろいろなことを学んで、大切なことに気付いていきたく  
と思いました。



## 命の大切さ

太宰府西小学校6年 中川 陽乃

私は、命は何よりも大切なものだと思います。私が思ううけは、命はお金では買えないし、一度失った命はもう取りかえせないからです。

私は、よくニュースを見ます。その時に、親からのぎやくだいで亡くなったり、クラスの人からのいじめで自分から命を落としてしまう人が何人もいることを知ります。

私は、親からぎやくたいをうけて亡くなる子を見ると心が苦しくなります。わけは、私より小さい子は私たちみたいに友達とたくさん遊んだり、たくさん友達と話したり、たくさんおいしいものを食べられたりできたはずなのにと思うからです。また、私は、この子は本当はもっと長生きができたのではないか、もっと幸せな時間をたくさん作ることができたのではないかと思います。この子

にぎやくたいをしていた親は、人の命を何だと思っているのかと思います。

また、クラスの人からのいじめで、いじめにたえきれなくなり、自分から命を落とす人もいます。

私の友達はみんなやさしく、私がこまっていると助けてくれます。

でも、このいじめられていた子は、助けてくれる人がいなかったということが多く、一人ですとかかえこんでいたと思うと、テレビを見ていると心が苦しくなりなみだが今にもあふれ出しそうになります。

ある人権に関わる詩を読んだ時、

「自殺は自分を殺してしまうことだけど、私はちがうと思う。この子は殺されたんだと思う。このいじめというものに。」

と書いてありました。

私はこの詩に納得しました。自分から命を落としてし

まった人はいじめにあったせいだからです。また、この子が  
いじめにあつていなかったら、この子は今でも生きていた  
からです。

このようなテレビを見ると、お父さんやお母さんが、

「命は大事だね。」

と必ず言います。私は、その言葉を聞くたびに同じ気持ち  
になります。

私は今、大切な友達がいいます。もし、友達がこまっていた  
ら助けて、小さいことから私にできることをやっていこうと  
思います。

また、もしいじめられている子がいたら見て見ぬふりを  
しないで先生などに相談していこうと思います。

そして、私も自分の命を大切にしていきたいです。





じんけんせくぶんにゆうせんせくひん  
人権作文入選作品  
(中学生の部)

わたし  
私にできること

太宰府西中学校1年 深川 那菜

いま、世界では新型コロナウイルスが猛威をふるっています。その中で、最近のニュースなどで「コロナ差別」という言葉が話題になっています。コロナ差別とは、コロナウイルスに感染していた人や濃厚接触者になった人たちが差別をされたりすることです。例えば、感染していた人の悪口をかげで言ったり、濃厚接触者だった人が触った物などを「あの人が触ったから触りたくない。」などと言って差別をしたりします。なぜ、このようなことが起こっているのでしょうか。

わたしはおおげんいんふあんきょうふしん  
私は多くの原因が「不安と恐怖心」からだと思いま

ちゅうがくせい  
中学生の部

す。コロナウイルスは世界中で流行っているため、誰でも不安です。しかし、だからといって行動や態度に示すのはいけないこと、思いやりが足りない行動だと私は思います。感染した人や濃厚接触者の人は悪意があつてなつたわけではないからです。私の学校でも「コロナ差別」のようないことが起こっていました。

わたしはがっこうせんげつ  
私の学校では先月クラスターが起き、多くの生徒がコロナウイルスに感染したり、濃厚接触者になりました。その中で、私も検査対象者となり、PCR検査を受けなければならなくなりました。母から「那菜、PCR検査を受けないといけなくなつたよ。」そう告げられた時、私はとても不安になりました。「もし陽性だつたらどうしよう、濃厚接触者だつたら…」と悪

イメージばかりをふくらませていたのです。そして検査も終わり学校が再開し教室に行くと、そこには驚いたことに半数のクラスメイト達しか来ていませんでした。私はコロナウイルスにこれ程の感染力があり、濃厚接触者の数に改めて怖さを感じました。その日の朝の会の時間に、校長先生や担任の先生から話があり、今回のクラスターについての詳細やコロナ差別を起こさないようにする方法を丁寧に説明されました。先生方はコロナウイルスの感染力の怖さとともに、コロナ差別を危惧していたのだと思いました。しかし、事は大きくないにしても、小さなコロナ差別は校内でも起こっていました。なぜなら、私がトイレに入っていた時、

「めっちゃ休んでない？学校に来てあまり近づかないほうが良いよね。」と小さな声で言っているところを聞いたからです。その生徒は誰なのかは分かりません。それを聞いたとき、私もその生徒の気持ちがありました。

私もコロナウイルスに対する恐怖心をもっているからです。しかし、先生方に言われたことを思い出して決して口に出してはいけなし、そのような小さなことが大きな差別につながるのだと思います。

「情けは人の為ならず」ということわざがあります。これは、「人に優しく接したり思いやりをもって行動したりすると、いつか巡り巡って自分にも返ってくる」という意味です。私もこのことわざに学んで、人の気持ちを考えること、思いやりをもつことを一番大切にして行動していこうと思いました。





# 「子どもにできること」

「がくせいらいんちゆうがくこつ」  
学業院中学校2年 上島 亜純

「辞任する事が発表されました。」

テレビから聞こえるニュースキャスターの言葉に、私は耳を疑いました。

「え、また誰か辞めるん？」

東京オリンピック開幕直前のある日の朝の事です。流れていたのは、オリンピック開閉会式演出チームの辞任についてのニュースでした。一人だけではありません。演出チームの辞任した人達の辞任の理由は、過去に差別やいじめをしていたことが分かり批判されたからです。このニュースを見て、差別や人権について学んできたことを思い出しました。

「人権」という言葉を、あなたは知っていますか？人権

とは、人間が生まれたときから持っている生命・自由・

平等などの権利の事です。小学校では「一人一人が生まれたときから持っている幸せ行きの切符」と教えてもらいました。一人一人が必ずもっている人権ですが、人権を守られていない人がいるのも事実です。いじめや差別などがあると、幸せになる事をじゃまされてしまう人が出て、人権が守られなくなってしまうです。どうすれば人権が守られるのか、守られないのか知るために、私達はいじめや差別、人権について小学生の頃から学んできました。道徳の時間だけでなく、学級活動や総合的な学習の時間でも学んできました。人種差別、部落差別、男女差別などどのような差別が起こったのか。差別を受けた人の苦しみ、悲しみ。差別をなくそうと立ち上がった人々が起こした運動。過去に差別などを受けていた人をサポートする場所があること。差別やいじめのおかしさ。自分たちに出来ること。沢山の事を学び、考え、気持ちを想像し、精いっぱいまわりの人に伝えようと努力してきました。人権



について学んだ事を中心に壁新聞やチラシを作ったり、  
「人権まつり」のステージ発表などで人に伝えようとし  
てきました。なかでも印象に残っているのは、小学五年生  
の時の「人権まつり」でのステージ発表です。過去に起  
こった公害による被害と被害を乗り越えた人々の姿を  
人権の大切さと結びつけて音読劇や合唱で表現しまし  
た。次の日、学年集会で学校あてに届いた感想を聞いて、  
一つ、心に残ったものがありました。

「こんなに大変な事が起こっていたこと、今まで知りませ  
んでした。水城小学校の五年生の皆さんが伝えてくだ  
さって良かったです。今まで学んできたことを忘れないで  
くださいね。」

この感想を聞いてとても驚きました。大人でも差別や  
人権についてまだ知る機会のない人がいると初めて知った  
からです。それと同時に学んできた私達が伝えていかな  
ければいけないのだという責任感を感じました。それか

ら私は人権についてさらに関心を持つようになりました。  
人権や差別、いじめに関する新聞記事を読んだりユー  
スを見たりして自分の意見を持ち、家族に伝えたりして  
います。今はコロナで学校関係者以外の大人と交流する  
ことが難しいし、学校行事もない、人権まつりもなく伝  
えていくことがとても難しい状況です。だからこそ、文章  
で、この作文で伝えていくことが大事だと思っています。

今こそ、人権について学んできた私達子どもが立ち上  
がるべきではないでしょうか。世の中には人権について知  
る機会がなかった大人が少なからずいると思います。オリ  
ンピック開閉会式演出チームの辞任した人達も人権につ  
いて知る機会がなくて差別やいじめをしてしまったのだ  
と思います。子ども一人の力では小さくてもみんなで力  
を合わせれば大きなことができると思います。学校  
の道徳の時間などで学んだことを、学んで終わりにして  
しまうのは、とてももったいないです。ほんの少し、伝える

努力どりよくをしてみませんか。最初さいしよは、親おやなど家族かぞくでもいいと思いますおも。学まなんだこと、学まなんで思おもったことを伝つたえるだけでも、人権じんけんについて知しらなくてももらえるきつかけになります。子こどもの姿すがたを見て、行こうどう動どうを改あらためる大人おとなもいると思います。ま

ずは、ここ太宰府市だざいふしの子こどもから、人権じんけんや差別さべつ、いじめについて知しらなくてもらうために、みんなで一いっ歩ぽ踏ふみ出だしましよ。そして、

「人権じんけんって何なに？」  
と言いわれた時とき、みんなで

「一人一人ひとりひとりが生まれた時ときから持もっている幸しあわせ行ゆきの切符きっぷだよ。」



## 男性だんせいも女性じよせいも同じおなじ人間にんげん

筑陽学園ちくようがくえん中学校ちゅうがっこう3年ねん 安部あべ 絵里加えりか

「いいお嫁よめさんになれそうやね。」

と親戚しんせきの叔父おじさんが私わたしに言いった。私わたしはその言ことば葉はを聞きいてムカツとした。

それは、おじいちゃんの法事ほうじの日ひでした。三年前さんねんまえに亡なくなったおじいちゃんは、優やさしい人ひとで、私達わたしたちが会あいに行いくと喜よろこんでくれて、必かならず食たべ物もの屋やに連つれて行いってくれる人ひとでした。だけど、おばあちゃんには亭主ていしゅ関白かんぱくで、元氣げんきな時ときでもお茶ちややご飯はんをつがさせていて、見みている私わたしは「自分じぶんで歩あるいてつぎに行いけばいいじゃん。」と何なん度も思おもいました。そんな人ひとだったおじいちゃんの冥福めいふくを祈いのるために、遠とくから親戚しんせきが二十人にじゅうにん近く集あつまってきました。私達わたしたちの家族かぞくは早はやめに着ついたので机つくえを並ならべたり準備じゆんびの手伝てつだいをしました。そして次つぎ々つぎと人ひとが入はいってきて、畳たたみのある部へ屋やに集あつまって来きました。そこ



でお坊さんが来てお経を読んだりしました。次は昼ご飯の時間でした。その前に、車の中に忘れ物をしたのに気づいて私と妹は車に取りに行つて、畳の部屋に戻つて行きました。そして部屋に戻つた時に、違和感を感じたのです。お母さんやおばあちゃんやおばさんやいとこのお姉ちゃん達など女の人々が全くおらず、お父さんやおじさん達がお酒を飲んで楽しそうに笑つたり話をしていました。男の人達しかいなかったのです、お母さん達はどこにいたのだらうと思つてキッチンのある部屋に行くとお母さん達が料理したりしていました。それを見て私は、「なんで男の人達は楽しそうに話したり騒いでいるのに、女の人だけ料理の用意しなきゃいけないんだらう。」と不平を感じました。男の人が料理できないのは分かっているし、男の人に騒ぐなど言うわけにもいかなしいお母さん達に休めばと言つても誰がご飯作るんだという事になるので、女性が料理するのは当たり前前の事かもしれないけど、その時の私は、不平等

じゃないかと、不平不満を強く抱いていました。そこへ、おばあちゃんが、手が空いている私に料理とお酒が乗っているお盆を渡して、運んでほしいと頼まれたので、畳のある部屋まで持つて行きました。でも、少し恥ずかしかったので、お父さんの所にお盆ごと置くと、お父さんが、「お酒ついでやれ。」と言つたので、仕方なく何人かについていたら、叔父さんが、「偉いね。いいお嫁さんになれそうやね。」と言つてきました。私は一瞬ムカツとしました。でも周りの人達は笑っていたので、言い返すこともできず、雰囲気なが流されて、苦笑いしてしまいました。

後から思い返せば、何であの時ムカツとしたのだろうと思つたり、逆に何で何も言い返せなかったのだろうと思ひます。でも、一年経つた今でもこの出来事を覚えてるという事は、私の中で嫌な思いがあったからだろうなと思ひます。

私は、この体験から、私のように、女性だからと言って



家事をしないといけない事に疑問を感じている人は少なくないと思います。そこで、家事がなぜ女性の役割なのか調べてみました。少し昔の時代の人は、男は仕事で女は家事と考えている人が多いと思います。でも今の時代は女性でも仕事をしている人が大半で私の親や身の回りの人達も女性男性が同じぐらい働いています。でも、女性の仕事と家事をしないといけない、男性は仕事だけが役割だと思っています。なので私は、女性の社会進出が進んでいるなら、男性の家事進出も進んでいくべきだと思います。そして、そんな中、苦しめる女性が声を上げられないのも問題だと思っています。そこで大切なのが男性も女性も同じ人間なので、人間は協力し合っていけないと生きていけないので、人が人を思いやって助け合うのは当たり前だと思ふので、男性が女性を思いやって助け合い、逆に、女性も男性を思いやって助け合うことが、一番大切なことだと考えました。



## いじめの連鎖を減らすために

筑陽学園中学校3年 今里 伸希

なぜ、いじめはなくならないのだろうか。

今回の作文を書くことがきっかけで、いじめについて調べてみたところ、いじめは子供だけでなく、大人たちの中でも存在するを知った。「いじめは良くない、やめよう。」そのようなことを大勢の人の前で語る大人たちの中にもいじめの加害者がいることを知り驚かされた。子供の手下といわれる大人達がそのようなことをしているのであれば、それを見て育つ子供たちが誰かをいじめてもおかしくないだろう。生まれたときから悪い心をもっている子供はいない。周りの環境が原因で後天的に悪い心をもつことになってしまう。

私が小学生の頃、一度だけいじめられたことがある。

幸いにも、周りの大人達の適切な対応のおかげですぐに

収まったが、今でもそのことを覚えている。当時の私は、いじめの加害者のことをうらんでいた。しかし先生は「彼のことをうらまないで。許してあげてほしい。」と私に言うてきた。なぜそのようなことを言われたのか、今の私には少し分かるような気がする。

このような経験をして私はいじめを無くすことは難しく思った。なぜなら、先述したようにいじめは連鎖していくと思うからだ。

しかし、いじめを無くすのは不可能、と表現せず、難しくと思う、といったのには理由がある。

それは、変われる人、悪い連鎖の中から救い出される人、反対に変わらない人、救えない人の二種類の人間がいるのを実際に見てきたからだ。二人の例をあげて説明する。

まず、私のことをいじめた「彼」だ。彼は事件が解決してから少しずつ人間性が改善されていった。

二人目は不登校になっている私のいとこだ。彼はいじめ



の加害者だったが、そのことがばれた結果、ストレスから引きこもりになってしまい、それ以来ここは、誰とも、家族とさえほとんど話さなくなってしまったという。

この二人は一体何が違ったのだろうか。

私は、周囲の人間や環境と本人の意思が大きく関係していると思う。周囲の人間が彼らの心と他者をつなぐドアを構築してくれる。それを開くカギとなるのが本人の意思、そんなイメージだ。私をいじめた「彼」はその事件以来少し引きこもりがちだったが周りの人間との関わりを絶つことをしなかった。その結果少しずつ性格が変わってきて、相手の気持ちを考えるようになっていった。周囲の人間に救われ、変わることができたのだ。一方で私のいとこは関わりとうとしてくれる人たちを拒み、カギをかけて自分の世界に閉じこもってしまった。変わることができなかった。

この二人のことを祖母に話すと祖母は、

「救えない人は救えない。私達に出来ることは周りが見えるように照らしてやることだ。」と言った。短い話だったがとても深い内容だと思った。

いじめを無くすことはできないけれど、減らすことはできる。これから先、「彼」のような苦しんでいる人に出会ったとき、その人を救ってあげられる人間に私はなりたい。

